わがまちが生んだ偉人

偉人から読み解く「文化形成」のヒント

手塚 正太郎 Tezuka Shotaro

文化を形にした石岡人

石岡市の『広報いしおか』平成29年(2017)3月1日号に「あまり知られていませんが、中央図書館の歴史は明治時代にまで遡ります」という書き出しの記事が載っている。見出しは「図書館は子どもが育つ場所だった」。サブタイトルは「現在の図書館の始まりは、明治の石岡町民の寄付からでした」とある。

読み進めると、一人の人物が登場する。手塚正太郎(1855-1931)である。記事は手塚正太郎(以下正太郎と略)が石岡尋常小学校(現 石岡市立石岡小学校)校長(二代目)時代、同校内に図書館を設立したことを伝えている。館名を「石岡書籍館(しょじゃくかん)」といった。明治22年(1889) 9月のことである。

明治34年(1901)発刊の『石岡繁昌記』(平野松次郎編集発行)は、石岡町(当時)の「学校図書館」の項でこの書籍館を次のように紹介している。

「石岡尋常小学校内に在り、備付部数1千内外に過ぎずと雖(いえど)も、此(この)種の設備あるは実に該町士民の気概をトするに足り、又嘉す可(べ)きの美擧(びきょ)といふ可(べ)し」と。

茨城県立図書館が設置されたのが明治36年(1903)2月のこと。石岡書籍館の開館は、それより14年も前にあたる。もちろん、県下で一番早い。しかも、民間の手による私設図書館である。『石岡繁昌記』が指摘するまでもなく、「該町士民」の「気概」を示す「美擧」であった。

この「気概」の中心にいた人物が正太郎だった。正太郎は石岡に領地を有した府中藩(後の石岡藩)の藩士、手塚大吾の長男として生まれた。幕末の激動期を経て、新しい世となった明治12年(1879)、正太郎は茨城県師範学校(茨城師範学校の前身)を卒業する。翌年、石岡尋常小学校の校長となった。

正太郎がなぜ、図書館をつくろうと思ったのか。正太郎が曽祖父にあたる府中クリニックの手塚克彦医師(74)は「それはわからないが、石岡の人たちに誇りをもってもらおうと思って図書館をつくったのではないだろうか」と推測する。

正太郎が館長となった書籍館は、大正11年(1922)度時点で和漢書2,945冊、洋書58冊を収蔵。閲覧者は600人を数えた。一方、運営にかかる経費は明治33年度が当時の金で3円だったが、大正11年度は15円に膨らんでいた。

こうした現状を見た当時の石岡町は、大正12年(1923)2月、議会に「石岡町立図書館設置の件」を提案、可決された。ここに石岡書籍館は役割を終え、その意思は町立図書館に引き継がれることになった。

この間、正太郎は石岡の誇りを歴史に求め、郷土の歴史資料の収集にあたった。特に熱心に調査研究した遺跡が常陸国分寺と国分尼寺であった。石岡史蹟保存会は昭和10年(1935)2月発刊の「石岡郷土誌資料」の中で正太郎の「常陸国分寺資料」を掲載し、研究を称えている。

『石岡市史』はこうした正太郎の事績を踏まえ、「近代石岡における郷土史研究の先駆者は手塚正太郎である」と記述する。

文化に触れる場所を図書館という目にみえる形で示した正太郎。そのDNAは、平成29年4月、石岡市に児童書専門館「こども図書館本の森」が創設されたように確実に引き継がれている。(文中敬称略)

主な参考文献
『広報いしおか』(2017年3月1日号)、『図書館百年記念誌』(1989年11月、石岡市立図書館発行)、『石岡市史 上巻』(1979年2月、石岡市史編纂委員会編)、『石岡市史　中巻Ⅱ』(1983年3月、石岡市史編さん委員会編)。

石岡書籍館を起源とする現在の石岡市立中央図書館
(石岡市若宮1丁目)　(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長
冨山章一